

後記

高橋文二教授（稿者は、同僚を先生と呼ぶ習慣を持たず、かといって目上の方をさん付けで呼ぶ非礼も避けたく、回りくどく、距離を置いた感触にもなるが、高橋教授と在職時の職名で呼ぶことにする）が「無事」というか、めでたくというか、残念なことというか、ともあれ、定年を迎えられ、「ご退職」なる。「駒澤國文」令号は、高橋教授の定年退職記念号である。高橋教授の令名は大学内外に広く行き渡っている。知らず知らずのうちに教授にひきつけられた人は多いことと思う。失礼ながら、マリックの奇術ではないが、その魔力的な求心力でも言おうか、不思議な力を備えていらっしゃる。ともかく、諸方面に亘って、知人がいらっしゃり、思わぬところで高橋教授の知己に出会い、驚嘆された方も少なくないことと思う。

「ご専門の源氏物語研究における、研ぎ澄まされた美意識と、深い人間洞察と、仏教への根源的なまなざしを基底とした論致は、他の追隨を許さず、独特の孤高峰とも呼ぶべき風景を形成してこられた。学部授業、あるいは、学外の諸講座等においての広く和らげた源氏物語・王朝文学講義は、魅力的な語り口も相俟って、場に参集した人々をとりこにした。おのずと教授を核とした輪が波紋のごとくに広がる。受講者は、めったに味わえない濃密な時と空間を共有する喜びに浸ったに

違いない。

高橋教授の関心の赴くところは、源氏物語、王朝文学にとどまらず、近代の三島由紀夫にもおよび、しかもその論は、近代の専門家に高く評価されている。さらには、王朝風（？）物語を紡ぎだされたこともある。これを言って曰く「行くところまさに、可ならざるはなし」と。（余計なことを申し上げれば、教授の出身高校、福島高校の同級生は、高橋教授が、東京大学教養学部理科 類を経て、数学・物理の研究者になっていると確信している節がある）

高橋教授は、本学文学部國文学科を卒業後、京都大学大学院を初めとして、文字通り全国行脚（その武勇伝は、時に酒席で、時に学科会議の合間に楽しく伺ったものである）の果てに一九七二年（昭和四七）、プーメランのごとく満を持して駒澤大学に戻り、職に就かれた。爾来三十七年の長きに涉って駒澤大学國文学科を支えてこられた。また、図書館長、学科主任、学部長、仏教文学研究所長を歴任なさり、大学運営にも力を尽くしてこられた。ただ、研究に比すれば、運営に関しては、その資質を、常に十全に発揮し得た場とは、正直申し上げて言いかねるのかなと思われる場面もあったように記憶する。しかし、勿論大過なくお勤めになり、学部長長時の学部教授会指揮における、名伯楽ぶりは鮮明に印象に残っている。あの無手勝流を貫くことが可能であり、結果までがきちんと着いてくるお方は、そう滅多にいるものではない。無

手勝流とは、具眼ならざる凡人の見え方であって、ご本人は、そう見せるのも芸のうちさと、まんまと計算にはまった凡愚をひそかにお笑いになっているのかもしれない。

閑話休題、本号は先にも記したとおり高橋教授退職記念号である。したがって、高橋教授にゆかりのある若い研究者をはじめとして、学科教員の多数の論稿を掲載する。質量ともに充実していると自負するところである。高橋教授をお送りする記念号として、誠に賑々しく、ふさわしい。しかし、巻頭を飾るご自身の御尊貌の映像がないこと（ただ高橋ワンダーランドを思わせる二葉を掲載する）また、教授の履歴、著作目録等ご自身にかかる情報が極端に少ないところが、退職記念号一般の体裁とは異なるところである。編集委員は、掲載する努力を放棄したわけではない。最終的に、高橋教授の強いご希望に従うこととしたまでである（このくらいのこととは言わせてください）。高橋教授は謎を残したまま深い霧の中を凡愚には見えないはるか彼方にあるものを見据えながら静かに道遥にうつこうとなさっているかのようである。おそらく、今後も私たちを驚嘆させるお仕事を披瀝してくださるに違いない。残される私たちは、断腸の思いを抱き続けながら、黙して、かつ賑々しく見送るばかりである。

最後に、本後記においての礼を逸している部分については、その責めは稿者が負うべきものであり、編集委員にあるのではないことを、付言しておく。妄言多謝。

文二さん、さようなら、ありがとうございました。

(林 達也)

編集委員

林 達也

勝原晴希

岡田 豊